

2年英語料の1学期評定

高橋 明浩

1 考え方

- 4月の授業開きにおいて、評定については次のようにプリントで説明した。

- ・今年から英語の授業では、通知票に書いてある4つの観点（英語の場合、①コミュニケーションに対する関心・意欲・態度、②表現の能力、③理解の能力、④言語や文化に対する知識・理解）を何回かに分けてA（すばらしい）、B（だいたいよい）、C（努力が必要）というように先生が記録していき、それをもとにして5、4、3、2、1の評定を決めていきます。これまでのように「学年の中で5は何人、4は何人、・・・」というやり方ではなく、「ここまでできたら3」というようになりますから、がんばればがんばっただけ成績が上がるようになります。もちろん、オール5をとることも全員が可能です。
- ・中間テスト、期末テストも上のように考えますが、成績の約50%の重みがあります。
- ・提出物（ワーク・ノート・レポートなど）、発言や発表、単語テストなども、A・B・Cでつけていきます。Aをたくさん集めると、評定の5がとりやすくなることでしょう。

2 テストから

- 中間テストは60点満点、期末テストは100点満点で作成。大問ごとに4つの観点を割り振った。

- ・①関心・意欲・態度をみる問題は、期末のみ反応数無制限（日記を書かせた）。
→ 多くの英文をいろいろな表現で書いているもの6文以上でA、2文以下でC。
- ・②表現の能力をみる問題は、中間17+期末13=反応数30。
→ ○+△の個数が21以上でA、10以下でC。
- ・③理解の能力をみる問題は、中間5+期末24=反応数29。
→ ○+△の個数が20以上でA、9以下でC。
- ・④知識・理解をみる問題は、中間25+期末20×2=反応数65。
→ ○+△の個数が46以上でA、19以下でC。
- ・観点ごとに、ExcelでA=1、B=0、C=-1とする。

3 授業記録から

- ①関心・意欲・態度の測定手段としてワーク、保健室での2回以上の欠課、発言、言語活動での情報交換数を集計。②表現の能力を測定する手段としては入国審査テストのみしかできなかった。③理解の能力と④知識・理解については、データが少なすぎたため授業記録は採用できなかった。

- ・①関心・意欲・態度の判断材料として、ワーク（0～15点）、保健室での2回以上の欠課（1回あたり-1点）、発言（1回2点）、言語活動での情報交換数（6点）を合計し、12点以上でA、4点以下でC。
- ・②表現の能力の判断材料としての入国審査テストは、5点満点中4点以上でA、2点以下でC。
- ・観点ごとに、ExcelでA=1、B=0、C=-1とする。

4 評定

- テストから算出した観点（4～-4）と授業記録から算出した観点（2～-2）を単純合計し、6点なら評定5、5～4点を4、3～-3点を3、-4～-5点を2、-6点を1とした。生徒の「自己カルテ」は、生徒の自己判断能力がつくまで成績には反映させない。

5 考察・反省

- このようにして評定を出した結果，2年生124名中，評定5が13名（10%），4が41名（33%），3が56名（45%），2が10名（8%），1が4名（3%）となった。二期はもう少し厳しくした方がいいのかもしれないが，よくなったはずの成績をみた生徒たちが，安心して怠けるか，ますます意欲をもって勉強し始めるかを観察してから判断したい。
- 結局，きちんと判断できたと思われたのはテストの部分のみだったように思う。
- 計算方法の違いだけであるように思われるが，数学科で行っているように，全てを合計してからパーセンテージで表示し，「90%以上は5」などとやった方が，生徒には説明しやすいように感じる。
- 授業における記録を残すのに，慣れていないせいもあって結構時間がかかり，十分満足できる記録を残せなかった。いかに記録を記号化（数値化）して，すばやくエンマ帳に書き留められるかを工夫する必要がある。例えば，英文を日本語訳させる場合，①関心・意欲・態度をみるために挙手させれば，（回数は記録できるが）答えられなかったりまちがっていたりした場合など，②理解の能力への記録もほしくなる。
- 発言と指名の使い分けが難しい。さらに，指名した場合でも，学級全員に完全に同じ条件で指名（同じ質問を次々にたずねるなど）するのは不可能である。どうしても必然的に難しい質問が当たる生徒と，簡単な質問に当たる生徒が出てきてしまう。
- 生徒の「自己カルテ」の活用がいまだできていない。本当は，カルテの欄の一つに（より正確な，生徒の自己評価観を育成するため）教師の評価（少なくともA，B，Cで）を書こうと思って始めたのだが，その時間がない。